

「ごんぎつね」(新美南吉)

市川 奈央子、片岡 文、田中 麻佑子、辻 友葵



一 作者と作品について

新美南吉(一九一三―一九四三年)は半田町(現・愛知県半田市)が生んだ童話作家である。本名は渡邊正八といい、四歳で母りゑを亡くし、八歳のときに母の実家に養子に出された。新美の姓は母方の姓である。ペンネームに「新美」を用いたことは若くして逝った母親への気持ちの表れではないか、と考えられる。

半田中学の頃から文学に興味を持ち、地元で代用教員をしながら童話や詩の創作を続け、雑誌『赤い鳥』に投稿した。その後東京外国語学校に進み、北原白秋や巽聖歌などに師事して文学修行に励んだ。卒業後、喀血の為帰郷し、女学校教師を勤めながら童話の他たくさんの詩や小説も書いた。しかしこの間にも病氣(結核)は進み、昭和一八年二九歳七ヶ月の若さで世を去った。新美南吉が東京外国語学校を卒業したころは戦時下であり、当時南吉は児童文学に関わるごく限られた人々に認められていたにすぎなかった。彼が再評価されるようになったのは、彼の死後十五年を経た一九六〇年代に入ってからのことである。

代表作として、教科書に掲載されている「ごんぎつね」「手袋を買いに」「おぢいさんのランプ」などがある。

短編童話である「ごんぎつね」は、作者の初期の代表作で、一九三

二年(昭和七年)の『赤い鳥』一月号に掲載された。作者の出身地である愛知県の地名が使われていて、権現山を舞台に書かれたと言われている。筆者が村の老人から聞いた話という体裁をとっている物語である。「城」「お殿様」「お歯黒」という言葉が出てくることから、江戸時代から明治ごろが舞台となっている。

「ごんぎつね」は小学校国語科教科書教材の定番とも言える作品である。もともとは一九五六年大日本図書国語科教科書に採用されたのが最初である。その後、次々と各社の国語科教育の教材として掲載されるようになる。多くの教科書に掲載されているため、「ごんぎつね」を知らない人はいないと言っても過言ではない。長年読み語られ続けている名作であると言える。

二 叙述について

これは、わたしが小さい時に、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。



「わたし」が「小さい時」に、「おじいさん」から聞いた話であるので、かなり昔の話であると想像できる。また、この「ごん」と「兵十」の話は様々なところで語り継がれている話であるとも考えられる。

ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。

「ひとりぼっち」とあることから家族がないことがわかる。ごんは、寂しい思いをしながら暮らしているのではないか。「小ぎつね」とあるが、どのくらいの大きさ、幼さか。「手袋を買いに」に出てくる子ぎつねよりは、成長しているきつねのようにも感じられる。

そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

「夜でも昼でも辺りの村へ出てきて」ということから、穴に一日中もっていることはない。ひとりぼっちの「ごん」がいたずらをするのは、誰かに構ってほしいからだと想像できる。さみしがりやだということがわかる。

二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。

「座っていました」ではなく「しゃがんでいました」とあることで、ごんは、平然としていたわけではなく、ちぢこまって孤独に耐えていたのではないか。

雨が上がると、ごんは、ほっとしてあなからはい出ました。

「ごん」が「ほっと」したのは、雨が止んで、やっと外に出られる

という安心感のためである。しかし、私たちは、「ごん」はやっといたずらができる、ということに対する安心感から「ほっと」したのではないか、とも考える。なぜなら、「ごん」はひとりぼっちであるがゆえに、何か(いたずら)をしていないと不安な気持ちになるのではないかと想像されるためである。「ごん」にとって、いたずらは自己表現の手段であり、いたずらをすることで、自分の存在を確認しているのではないだろうか。

また、「はい出ました」とあることから穴の出入り口はそれ程広いわけではない。

空はからっと晴れていて、もずの音がきんきんひびいていました。

「からっと」とあるので、乾燥していて、天気の良い秋晴れ。もず(百舌鳥)のギチギチという声突きぬけるように響き渡っている。

ごんは、見つからないように、そうと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとぞいてみました。

「そっと」ではなく、「そうと」となっている。「そうと」のほうが、ごんが周りに注意を払い、警戒しながらのぞいている感じが伝わる。

「兵十だな。」と、ごんは思いました。

一目見ただけで、その人物が「兵十」であることわかることから、「ごん」はこの村のことを良く知っている。村の人間のこととも名前まで把握しており、かなり詳しいことがわかる。

兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。

「ごみといっしょにぶちこみました。」という表現から、売り物にするために魚を取っている可能性は低いと考えられる。

兵十がいなくなると、ごんはびよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。

「びよい」という表現から、「ごん」が小さく跳ねるようにして草陰から出てくる様子が想像できる。

ちよいと、いたずらがしたくなったのです。

「ごん」はいたずらばかりするきつねである。雨が降り続けたため二、三日穴から出られなかった「ごん」はいたずらがしたくてしようがなかった。「ちよいと」から、「ごん」の軽いつたずら心が読み取れる。

ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぼんぼん投げこみました。

「びくの中の魚をつかみ出しては」の「は」があることで、「ごん」が魚をつかみ出して川に投げ込むという動作を繰り返したことが分かる。

「ごん」は、決して魚を食べたいわけではなく、単に川に投げ込み、「兵十」の努力をむだにしたいだけである。「ごん」は、軽く



いたずらしようとだけ考えている。

「ぼんぼん」という表現から、びくの中には魚がたくさんいたことがわかる。また、「ぼんぼん」という軽快な擬態語から、「ごん」には「兵十」がとった魚たちを逃がしてしまうことに全く罪悪感を感じておらず、ためらいがないことが分かる。

どの魚も、「とぼん」と音をたてながら、にごった水の中へもぐりこみました。

「とぼん」よりも「とぼん」の方が、軽く聞こえる。文中には、「太いうなぎ」や「大きなきす」という描写があるが、魚が着水する音からは、それほど魚は大きくないようだ。

ごんは、そのまま、横とびにとび出して、一生けんめいに、にげてきました。

村でよくいたずらをする「ごん」だが、兵十から必死に逃げていることから、人間に捕まったらいけないということを分かっている。「横とびに」とあるので、「ごん」は体勢を整える暇もない程、大急ぎで慌てふためいて逃げたことが想像できる。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、あなの外の、草の上に載せておきました。

逃げている途中、うなぎを外す余裕がないほど必死だった。うなぎを「すてる」のではなくて「のせておいた」のはなぜだろうか。

なぜ、「ごん」はそのうなぎを食べないのか。「兵十」から逃げてほらあなの近くまで行くことができたなら、落ち着いてそのうなぎを食

べることも可能ではないか。

こんなことを考えながらやってきましたと、いつのまにか、表の赤いいどのある、兵十のうちの前へ来ました。

「いつのまにか」とあることから、兵十の家の前に来たのは偶然で、「ごん」は兵十の家に行くつもりなどはなかったのではないか。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

「兵十のうちのだれか死んだんだろう。」ではない。「か」ではなく、「が」であることで、「ごん」が兵十に対して、興味を持っていることが強調されている。

ごんはのび上がって見ました。

葬式での「兵十」の様子が気になっている。

いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ごん」は「兵十」のいつもの顔を知っているということが分かる。普段は、さつまいもみたいな元気のある顔をしているが、今日は赤黒い表情で元気がない様子が読み取れる。また、「なんだか」という表現から、なぜ「兵十」の顔がしおれているのかは、ごんには分からない。

「ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

「ちよっ」や「あんな」ということから、自分のいたずらが、くだらないことだったと心底後悔している。「兵十」の母親が亡くなったと

分かった瞬間に後悔の念が押し寄せている。冒頭に「ひとりぼっちの小ぎつね」とあるので、自分の母親に対する思いと重ね合わせているのかもしれない。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

「兵十」と「ごん」は母親がいない、という点で同じ境遇にある。「ごん」に母親がいない理由は、本文には書かれていないが、母親がいないことで「ごん」が寂しい思いをしていることは読み取れる。

また、「ごん」の一人称が「わし」から「おれ」に変わっている。人間にとっては場面によって一人称を変えることはあるが、きつねである「ごん」が一人称を変えるところはあまりないと思われる。なぜ一人称が変わったのだろうか。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしました。

「ごん」がいたずら以外で、快感、達成感を覚えた場面ではないだろうか。「まず一つ」ということは、これでうなぎのつぐないを終わらせるつもりではなく、まだ何かしようと思っている。しかし、ここでは「兵十」の反応を見ておらず、自己満足で終わってしまった。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだろう。おかげで、おれは、ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどいめにあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。

「いわしなんか」「ぶつぶつ」から不平・不満といった、ネガティブな気持ちがよく表れている。

「ごんは、「これはしまった。」と思いました。

いわし売りからいわしを取ったのは、「兵十」への申し訳ない気持ちゆえの行動だった。いたずらする時のように、悪意があったのではない。「兵十」の独り言を聞き、この時初めて自分の行動が逆に「兵十」に迷惑をかけるものであったことに気付く。

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに、くりや松たけなんかを、毎日毎日、くれるんだよ。」

不思議に思っている。しかし、いわしの時と違って「くれる」という表現から嫌な気持ちではないことがわかる。

また、「いわしなんか」と「くりや松たけなんか」では意味が違う。「なんか」には様々な意味があると、私たちは考える。「なんか」を使った例文をいくつか挙げる。

① ヴイトンの財布なんかいただけません。

② ヴイトンの財布なんかいらぬ。

③ 私なんかにはもつたない。

④ ヴイトンやエルメスなんかの鞆がほしい。

「いわしなんか」の「なんか」は例文②に似た、ネガティブな意味を持つ。「くりや松たけなんか」の「なんか」については、議論となったが、私たちは例文④に似た、「くなど」という意味を持つのではないかと考える。

「ぶうん、だれが？」

「兵十」が相談しているのに対して「加助」はあまり関心がなさそ

うである。前の兵十のセリフに「だれだか知らんが」といつているのに「だれが？」と言っているの、あまり話を聞いていなかったこともわかる。

ごんは、「お念仏があるんだな。」と思いながら、いどのそばにしゃがんでいました。

「兵十」と「加助」の会話が気になって、二人が出てくるのを待っている。他の箇所にも「しゃがんで」という描写があるが、ここでの「しゃがんで」からは、「ごん」の心細さではなく、単に身を潜めている「ごん」の様子が想像できる。

兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

かげぼうしとは、光が当たって、障子や地上などに映る人の影のこと。今は夜なので、かなり月の光が明ることがわかる。「ごん」は、「兵十」の影をふんでいるのだから、ずいぶんと「兵十」とちと距離が近いと思われる。今までは物置や草や六地藏に隠れていたが、この場面では、「ごん」は何にも隠れていない。「兵十」にくりなどを毎日あげることによって「兵十」に対して親近感がわき、警戒心がとかれたのか。

「ふみふみ」と書いてあることから、「ごん」は二人の会話に興味はあるものの、少し退屈しながら、後をつけているとも考えられる。

「さっきの話は、きつと、そりやあ、神様のしわざだぞ。」

さきほどあまり関心を持っていなさそうだったのに、実はずっと考えていて、しかもだいたい時間がたってから唐突に切り出すという、「加

助」の個性的なキャラが出ている。「しわざだぞ。」と断言しているのも面白い。

「ごんは、へえ、ごんはつまらないな。」と思いました。

「兵十」に対する申し訳なさから、毎日栗やまつたけを捨てているが、それと同時に、栗をあげているのは自分だと知ってほしいという気持ちも強くなる。誰かにかまってほしい、自分の存在に気付いてほしい、という「ごん」の気持ちがよく現れている。

「おれが、くりや松たけをもつて行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃないか、おれは、ひきあわれないなあ。」

「持っていくってやる」という表現から「ごん」が「兵十」に「やってあげている」という思いを少なからず持っていると思われる。また、「ごん」はばれないようにくりや松たけを届けているわけだから、本当にお礼が欲しいとは思っていない。ただ、自分がやっていることなのに、他人（この場合、神様）に感謝しているということが腑に落ちていない。「ごん」は心のどこかで、「兵十」に、自分の存在に気付いてほしいと思っているのではないだろうか。「ごん」にとっては、くりや松たけを兵十に届けることは、すでにお詫びやつくぐないではなく、親近感の湧いた「兵十」に届けるという習慣になっているのではないか。

それで、ごんは、うちの裏口から、こっそり中へ入りました。

「兵十」に見つからないように、足音を立てずに「こっそり」裏口を使っている。前の部分で、「おれにはお礼を言わないで、神様に…」と思っているが、やはり自分があげているということを知られたくない。

い、知られてはいけないと思っている。

こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつめが、またいたずらをして来たな。

「兵十」は「ごん」に対してごんぎつね「め」と思っている。「め」は憎らしい相手につけるものである。つまり、「兵十」は「ごん」のことを覚えており、憎いと思っている。

どうして、「」の中ではないのか。「」から出ていることで、とっさの感情を表しているのか。

「ようし。」

「ようし。」には、これからの行動に対する意気込みや、「やってやる。」という気持ちが込められる。

ここでは、魚を盗られたことに対する復讐の気持ちや、こらしめてやるうという気持ちが含まれている。

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

物語のクライマックスでの「兵十」のこのことばはとても印象に残る。倒置法であることも、印象を強くさせる。「ごん」が栗をくれた、という事実を驚いている「兵十」の様子が読み取れる。

今まで「兵十」は「ごん」を「ぬすとぎつね」や「ごんぎつね」など「ぎつね」としかとらえていなかったが、ここでは「ごん」という名前ですんでいる。また、なぜ「兵十」は、「ごん」の名前を知っているのか。もしかすると、この村ではよくいたずらをする「ごん」をみんな知っていて、村の人たちが「ごん」と呼んでいたのかもしれない。

それで、「兵十」は「ごん」に対して憎いという気持ちが消え去った今「ごん」と呼んだのだろうか。

兵十は、火なわじゆうをばたりと、とり落としました。

「そっと」などではなく「ばたりと」から、驚きが表れている。

青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。

細く出ている青い煙が、「ごん」の命を表現しているように感じられる。つつ口から出ている煙がいずれは消えるように、かろうじて細く繋がっている「ごん」の命も、間もなく消えてしまうであろうことが想像できる描写になっている。また、「ごん」を撃ってしまったことを後悔する、力ない「兵十」の様子が分かる。

三 考察

(一) 物語の語り手・視点の変化

物語は、「これは、わたしが小さい時に、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。」という一文から始まっている。ここでの物語の語り手は「わたし」であり、作品の中だけに存在する人物である。この「わたし」は、「わたしが小さい時に」とあることから、今は、ある一定の年齢に達していて、この物語の語り手としての役割を果たすものとして南吉が設定した人物でもある。

では、「わたし」は一体誰に向かってこの物語を語っているのだろうか。語りの構造を図式化したものが図1である。まず、「ごんぎつね」という悲劇の物語は、かつて茂平という老人によって語られていたも

のであり、かつての「わたし」は多くの聞き手のうちの一人として存在していた。その「わたし」が成長し、今度は物語の語り手となり、それに対する聞き手も存在する。その様子を私たちが読者が、読んでいくことになる。

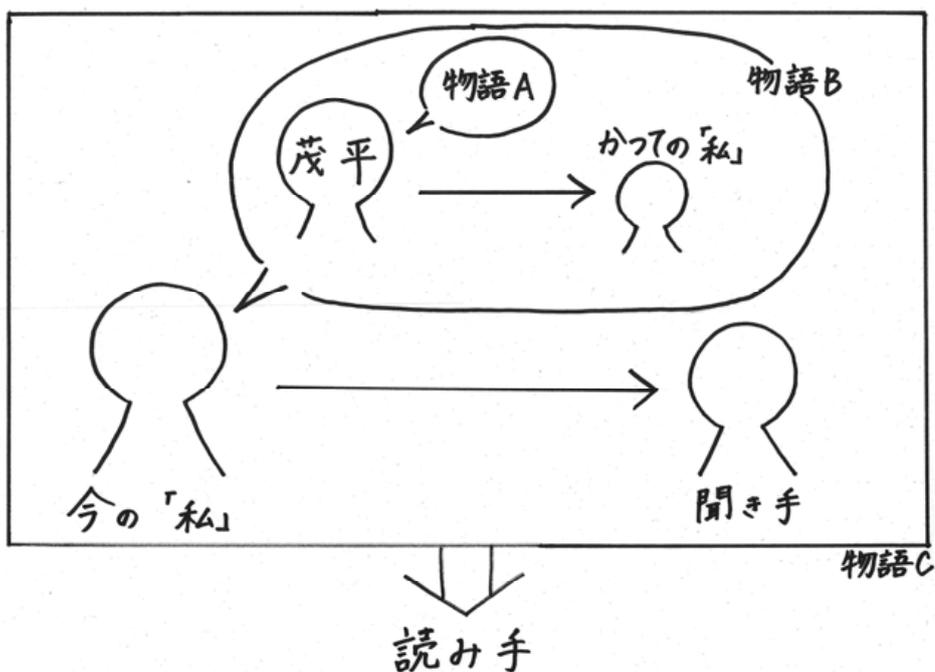


図1 「ごんぎつね」の語りの構造

では、なぜ南吉はこのような複雑な構造を物語に組み込んだのか。別段、このような構造がなくとも、話の内容を理解するのに困ることはない。それに加え、一文目が出てきた「わたし」は、この作品から早々に退いてしまっていて、その後作品に直接登場することはない。初めは「わたし」の語る内容が作品を構成しているが、作品の三段落目以降からは、「ごんぎつね」の話は、茂平によって語られた物語Aによってだけで、いわば自立的に展開しているのである。そう考えると、まずまず、なぜ物語の最初の一文が必要だったのか、と疑問に感じられる。この一文があることで、読者にどのような影響が及ぶのであるうか。この一文があり、複雑な構造が物語に組み込まれていることで、読み手を作品の深い所まで引き込むねらいがあるのではないかと考えられる。読者は「ごんぎつね」の物語Aに達するまでに、「わたし」の話を書く「聞き手」になり、さらに茂平の話を書いた「かつての私」の立場になる必要がある。読者は、語り手に導かれるようにして物語に入り込んでいくことになるのである。また、『「ごんぎつね」をめぐる謎』（府川源一郎）の文中で、府川氏は「自らを作品世界の入り口に立たせてみるところに、虚構体験としての文学体験へと読み手が踏み出す第一段階がある。」と述べている。

読み手が他者の視点に立って物語に入り込んでいくことで、物語に疑似的に参加することが可能となる。このような複雑な構造が組み敷かれてるのは、読み手を深く物語に引き込むねらいがあるのではないかと考えられる。

また、物語の視点の変化にも気になることがいくつもある。「ごんぎつね」は基本的に三人称の視点から描かれている。第一場面から第五場面が「ごん」の視点で書かれており、主に「ごん」の心情が描写さ

れている。しかし、第六場面の「その時、兵十は、ふと顔を上げました。」からは、兵十の視点で書かれている部分が出てくる。この視点の変化から、「ごん」の兵十に対する思いや、「ごん」の行動の真意を知って変化する兵十の気持ちを描写されるようになるのである。しかし、その後に出てくる、「兵十はかけよってきました。」という描写は、「ごん」の視点から書かれたものである。なぜ、「兵十はかけよりました。」ではないのか。なぜこの部分だけ、物語の視点が兵十の視点から「ごん」の視点へ転換したのか。「兵十に撃たれてしまったけれど、これで自分の気持ち兵十に伝わる。」という「ごん」の気持ちを表現するという効果があるかもしれない。しかし、依然疑問が残る点であり、「ごんぎつね」を指導する上で、文がどの視点から書かれているのかを教師が考え、理解しておくことの大切さを感じた。

(二)「ごん」がいたずらをする理由

「ごん」がなぜいたずらをするのか疑問に感じたのは、兵十の獲ったうなぎを「ごん」が食べなかったことに違和感を覚えたためである。キツネは肉食に近い雑食性であり、鳥やウナギ、小動物や昆虫を主に食べる。とすると、「ごん」がうなぎを食べることは十分に考えられることであり、逆に、なぜうなぎを食べないのか、という疑問が生じる。兵十がうなぎを獲るのは、単なる暇つぶしではなく、生活をかけた行動である。しかし、それに反して「ごん」はそのうなぎを食べようとしない。つまり、「ごん」にとっては、ちよつとしたきまぐれやいたずらなのである。そのことは、うなぎを食べないこと、そして、首に巻き付いたうなぎを、自分の生活空間である「あな」に持ち込まず、「あな」の外の草の葉の上のせておいたことから分かる。

「ごん」はいたずらを、肉体的・生理的欲求を満たすためのものは考えていないことが分かる。そうすると、いたずらは何の欲求を満たすためのものなのであろうか。「ごん」は村人の生活に関わりたい願望を強く抱いているのではないかと考えられる。ひとりぼっちの寂しさを紛らわしたいという精神的欲求を満たすためにいたずらをしていのではないか。

「あな」は「ごん」にとって安全な生活空間であると言える。しかし、「ごん」は食欲などの生理的欲求以外で頻繁に「あな」から出るとつまずり、肉体的・生理的欲求よりも、寂しいという精神的欲求が勝っていると考えられる。

「ごん」がいたずらする理由を、仮に、寂しさを紛らわし、精神的欲求を満たすためのものであると考えたと、なぜ、「ごん」はひとりぼっちなのか、なぜ母親が存在しないのか、という疑問を抱くようになった。その点については、(三)で考察をする。

(三) 南吉の作品における母親の存在

「ごん」がいたずらをする理由を考えると、なぜ「ごん」に母親がないのか、疑問に思うようになった。また、南吉の他の作品を見ても、母親が大きく関わっているものが沢山ある。その代表的なものが、同じく教科書教材となっている「手袋を買いに」である。ここでは、南吉の作品における母親の存在について考えてみたい。

南吉は、四歳の時に生母と死別し、孤独な幼少期を過ごしている。生母と死別した後は、生母方の実家へ養子に出されるが、結局は生まれた家に戻ってくる、という波乱に満ちた人生を送っている。この南吉の経験から、南吉の作品を北吉郎氏は『新美南吉童話の本質と世界』

において次のように述べている。

生来の性向もあつてか、(他者との結びつき)における極度の「障害」——対話により共感を育み、交流することが困難である——が形成される。そうした対人関係における深刻な「障壁」を、既に幼少年時代において抱え、思春期や青年期を生きていくことになる。幼少年期からの、未だ満たされずにきた、(他者との結びつき)における最大の空白(すなわち飢餓感)——(失われた母の愛)のむくもりや安らぎ感——は、生存自体さえ危機に陥れるほどの欠落感(「寂しさ」として(絶えず無意識層から噴き出してきて)南吉を遅い、空想世界での(母恋い)童話として文学作品上に実現されていった。

このことから分かるように、南吉は母親からの愛情に満たされない幼少期を過ごし、その経験が、作品に色濃く反映されている。南吉の作品の多くに、悲劇性が含まれるのもその為ではないかと考えられる。

「ごん」に母親がおらず一人ぼっちだったという状況は、南吉自身の経験と一致する部分が多い。「ごん」のいたずらを、寂しさを紛らわしたいという精神的欲求を満たすためのものであると考えたならば、南吉自身の気持ちを想像するのも難くない。

また「ごんぎつね」においては「ごん」だけではなく、兵十も母親を亡くし、一人ぼっちになっている。この作品には「一人ぼっち」である登場人物が二人(一人と一匹)も登場する。南吉が彼自身を照らし合わせているのは、「ごん」であるかもしれないし、兵十であるかもしれない。「ごん」と兵十のどちらにも彼自身を照らし合わせていると

も考えられる。

「ごんぎつね」において、「ごん」の母親に対する感情が最も現れているのは、「兵十のおっかあは、どこについていてくちよつ、あんないたずらをしなけりやよかった。」という部分ではないか、と考える。しかし、ここで、「本当に兵十は母親に食べさせるために、うなぎを獲っていたのか。」という疑問が生じる。本文中のどこにも、兵十が何の為にうなぎを獲っていたのか書かれていないし、ましてや、兵十の母親が亡くなるまで、「母親」ということばは作品中では大きな意味を持っていない。傍線部はあくまで「ごん」の想像にすぎず、事実であるかどうかは分からない。つまり「曖昧」であると言える。(「ごんぎつね」における曖昧さについては(四)でも述べる。)また「ごん」のいたずらが直接的に兵十の母親の死に関係したという証拠はないにも関わらず「ごん」は「うなぎのつぐない」を自発的に始める。何気なく読めば、流れていく部分ではあるかもしれないが、じっくり読めば、不自然な部分があることはよく分かる。ここにも、南吉の母親に対する想いが濃く反映されているのではないだろうか。傍線部が読者にとって不自然である話の展開であるということに、南吉が気付いていないとするならば、なおさらである。

こうした南吉における母親の問題を北吉郎氏は、南吉の初期・中期・後期の各期を代表するきつねの物語である「ごんぎつね」↓「手袋を買いに」↓「狐」で考えている。「ごんぎつね」では、生身の母親は登場せず、一人ぼっちの主人公の心理や行動に記憶の中の母親が深く関わっている。これは、南吉自身の体験に最も近い形で、南吉の心理が作品に反映されているとも考えられる。次に、「手袋を買いに」では、生身の母親が子と共に登場するが、生きている母親を描いた時に、南

吉の中で限界が生じている、と北氏は述べている。そして、南吉が死を目前にして書いた「狐」では、生身の母親が登場し、理想的な母親を具現化させている。

このように、南吉の作品における母親の像は、変化してはいるものの、共通して作者自身の経験や想い、願望が作品に反映されていることが分かる。

(四) 「ごんぎつね」における曖昧さ

「ごんぎつね」の話の展開のなかで、曖昧であると感じる部分がいくつかある。(三)で述べた、ごんが考えるように、兵十は母親のためうなぎを獲っていたのか、という点もいくつかある曖昧さのうちの一つである。

他にも、「小ぎつね」とあるが、どのくらいの大ささ、幼さか、ということや、兵十のごんへの憎しみの程度はどれほどか、最後は本当にごんの気持ち兵十に伝わったのか、ごんは最後に死んでしまったのかなど、本文に直接書かれていないことが沢山ある。

「小ぎつね」については、①幼い子どものきつねであるという解釈もあるが、②小さい大人のきつねであるとも解釈できる。どちらの解釈をするかによって、作品自体に対する印象も変わるのではないか。つまり、作品に込められた、南吉が抱く母親に対する想いの受け取り方も変わってくるかもしれない。また、①で解釈するとして、幼いといってもどのくらい幼いのか、と考えることもできる。「手袋を買いに」に出てくる子ぎつねと比べてどうだろうか。「手袋を買いに」にでてくる子ぎつねより「ごん」の方が成長しているのではないかと考えられるが、読み手によってその解釈やイメージも変わるだろう。ただ、「手

袋を買いに」では、「子どものきつね」とあるので、「ごんぎつね」では②の解釈の方が適当ではないか、とも考えられる。

このように、「ごんぎつね」には曖昧さが多く含まれていること分かる。曖昧が多いために、解釈のバリエーションも増え、作品から感じることも読み手によって異なるのではないだろうか。

(五)なぜ「ごん」は兵十に撃たれなければいけなかったのか。

小学生だった時に、私(担当者)は「ごんぎつね」を読み、とても悲しい物語だと感じたことを今でも鮮明に覚えている。他の小学校国語教科書の教材を見てみると、動物が出てくる作品の多くは、人間と動物が心を通わず、といったような心温まる話が多いように感じられる。しかし、この「ごんぎつね」では、「ごん」が兵十に誤解され、撃たれてしまう。所謂ハッピーエンドではない。

府川源一郎氏は、南吉を「人と人とのかわりの問題とその亀裂を見つめ続けた作家でもある。」としている。対人関係における障害を抱えていた南吉は、人間観察の結果、人間背信とも言わなければならない作品を多く残したというのである。南吉の作品の登場人物の多くは、人と人との強いつながりを求めるが、最終的にはその願望が叶わない。

「ごん」は兵十とのつながりを求め、接近するが、最終的には兵十に撃たれてしまう。「ごん」は自らを犠牲にし、想いは兵十に伝わったように思われるが、決してハッピーエンドではないのである。南吉の作品には、人間懐疑のメッセージが含まれているように思えてならない。『手袋を買いに』でも、無事に帰ってきた子ぎつねを前にして、母ぎつねは「本当に人間はいいものかしら」とつぶやいている。

南吉は作品に人間懐疑のメッセージを含ませることで、他者と心を

通わすことの難しさを伝えたかったのかもしれない。

参考文献

北吉郎、『新美南吉童話の本質と世界』、双文社、二〇〇二年
府川源一郎、『「ごんぎつね」をめぐる謎』、教育出版、二〇〇〇年

